



アブラナ科品目における細胞融合技術を利用した CMS (細胞質雄性不稔) 育種

ブラシカ科品目の F1 育種において、2 つの方法が使用されています。1 つは '自家不和合性' (SI) を利用する方法で、もう一つは '細胞質雄性不稔' (CMS) を利用する方法です。アブラナ科品目における CMS を利用した育種は、1980 年代後半に細胞融合技術によって開発されました。この技術により作出された産物は、欧州における GMO (遺伝子組み換え作物) の規制対象外です。

Bejo Zaden B.V. のアブラナ科品目の育種プログラムにおいては、両方の育種技術が適用されていますが、有機種子の育種プログラムにおいては、すべて自家不和合性 (SI) が適用されています。